

昭和三十一年七月十五日發行
三種郵便物認可
（毎月一回・十五日發行）

（通第一七七号）

慈光

目次

歳旦に想う……………	花田正夫……………	(1)
教行信証「信楽釈」……………	近角常観……………	(3)
おお先生に手をひかれて……………	聴聞子……………	(8)
近角先生を憶う……………	室住熊三……………	(12)
虚仮と真実……………	阿刀田令造……………	(14)
酒見先生「信仰講話」……………	西村正安……………	(19)

第十六卷 第一号

歳旦に想う

花田正夫

慈光誌も皆様方のご念力と、諸先生のお導きに支えられ

て、第十六巻に進み得ました。年頭、ただ深く御礼を申し上げ

ます。そして私も馬齢六十を数えました。孔子は、六十

にして耳順^{みみしたが}う、と申しました。六十にも達すれば人生の裏

も表も知りつくして、どんなことも受け容れることの出来

る広い理解とやわらかな心になるべき齡だ、とのことであ

りましょう。然し私の毎日の生活はあべこべで、心狭く耳

さかろうことばかりで、聖^{せいじん}人の道は全く日暮れて道遠きを

いよいよ知らされるばかりであります。

それにつきまして、かつて福島先生から頂いて居ります

生涯の行路、これ修羅^{しゆら}。

ひるがえつて思う、何^{いづれのところ}処かこれ安宅^{あんたく}、

ただ、無量寿仏陀^{むりやうじゆぶつだ}まします。

老師がいよいよわが身は罪惡深重、煩惱熾盛の身と自照せ

られては、ただただ弥陀^{いただ}仏の本願ひとつが唯一無二のや

すらぎの家宅^{いえ}よと渴仰し随喜していられる詩であります。

次に、池山先生の六十の歳旦の歌を思いあわせませう。

たのまるるただ念仏のわれにあり

さるべき業は さもあらばあれ

六十を迎えられた先生が年頭まず若水をつかい仏前に正座された心中の表白であります。先生は、

「私も人並によかれと願ひながらとうとう六十の坂に辿りついた。その願ひ通りに行けたなら業苦も年々にすくなくなつて行くはずなのに、事実はこれと反対に、次から次へと業苦は重くなるばかり。それも身から出た錆^{さび}でのがれようはない。年頭からすでに三つ四つと業苦はチャンと控えている。

ただここに、煩惱具足の身として、生死の苦海を離れることの出来ない身を仏はかねて知ろし召して、たすけ遂げずばやまじとの大願をおこして、ただ念仏をおあたえ下さっている。この悲願一つのたのもしさで業苦をうけさせて頂くばかり云々」

大体こんな意味の解説をして下さいました。さらに、

「歎異抄の第七章、念仏者は無碍の一道なり云々の全章が、単なる言葉でなく体験として味うことが出来るようになった」ともつけ加えられました。

こうしたことを聞かせて頂いてからすでに三十余年、その間身にも余る業苦に直面することに、この歌が心に浮び、口に出て、行路難にあえぐ私の行方を照らされ、無限のやすらぎとはげましを頂いて、自然に問題も解けて行くという工合に越え越えて六十の坂に辿りつきました。これからも生きの日の限り力と光を蒙ることでありましょう。

さて、この「たのまるるただ念仏」とあります一句につき最近にこと新しく気づかせて頂きました。然しこれも私の愚鈍^{ぐどん}さ故に浅薄な読み方をして居りましたので、実に恥じ入るばかりでありますが……。

この一句は、申すまでもなく、点滴^{てんてき}岩をもうがつの譬え通り、仏様のうまずたゆまずおそそぎ下さる大悲大願のおまことが身にしみわたつて、自然にたのみとなり力となつて下さる念仏のたのもしさをあらわされたのであります。が、ことあたらしく気づかせて頂きましたのは次のことからであります。

歎異抄の十一章に「弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまいらせて生死^{まうい}をいずべしと信じて、念仏のもうさるるも、如来の御はからいなり」とあります。次に十六章に

「すべて往生にはかしこきおもいを具せずしてただほればれと弥陀の御恩の深重なることつねにおもいいだしまいらすべし。しかれば念仏ももうされそうろうこれ自然なり」とあります。

これらは自力作善の「申す念仏」と、他力自然の「申さる念仏」とが的確に言い分けられてある妙言であります。

池山先生の今一つの歌に、

よきひとの仰せにききて御名を呼べば

よばわせたまうみ声きこえぬ

とあります。よき人親鸞^{しんらん}聖人の仰せを蒙つて南無阿弥陀仏と御名をよばせていただく、そこに西岸上の弥陀仏のみ声^{こゑ}がきこえて来るとのこと、呼ぶまんまが喚ばれて居り喚ばれるままに呼ぶ、二つのままが一つ、一つのままが二つとところ合つたたのもしさであります。迷い子が声からして空しく荒野に母を呼ぶたよりなさではありません。さて「たのまるるただ念仏」も、こちらから盲滅法に単に「たのむ念仏」でなしに、向うから頼み力になつて下さる頼もしさの伴う如来廻向の念仏であります。

この他力自然、義なきを義とされる妙趣がたのまるるの一句に言いあてられていて、これ以外におきかえようのない妙句と今更の如く驚ろかされて居ります。これは単なる言葉のあやではなく、先生のお心が深く仏地に樹てられているところから自然に流れ出た至言で、これ以外に言いようのない、然も一句で他力自然の妙趣を全現されているのであります。

「教行信証」 信樂釈

近 角 常 観

第九席 (三)

なお茲で序に申しますに、此の『華嚴經』は広大なる仏境界を説かせ給いたる經にして、釈尊成道後三七日の間に、広大なる悟りの境界に在りて、有りとある仏菩薩が重々無尽に在らせられる蓮華藏世界の有様を説き給いたが、この『華嚴經』である。

処がこの『華嚴經』の説法が順次進んだところに、その広大なる仏境界なる蓮華藏世界に入る有様を説き給いたる、所謂「入法界品」がありて、其処に有名なる善財童子求道のことがあるのであります。これは私の能く言う求道者の模範とも言ふべきもので、それに善財童子がありとある人々に遇いて法を求め、遂に五十三の知識に遇うたという事があるのである。之を一々言うと、中には盗人について道を求めたというようの事さへあるのであります。

而してその一番最後の五十三番目に普賢菩薩に遇い、して普賢菩薩より阿弥陀仏の法を聞きて、ここに始めて安心して法界に入つたということになつてある。

而して其処に、彼の名高き、「我れ面のあたり阿弥陀仏を見奉つて、安樂国土に入つた」という意味の文があるのであります。して只今拝読する『華嚴經』の御文は、実にこの「入法界品」の文なのであります。

斯くここにも阿弥陀仏の本願念仏と『華嚴經』との關係が伺われるのである。去りながら、親鸞聖人は「入法界品」の文だからとて、ここに『華嚴經』をお引き下されたのではない。なお他の所も沢山お引きなされてあるのであります。

○
なお、も一つ進んで申すならば、此の『華嚴經』と浄土門との關係は、初めて日本に於いて念仏の宗門の起つたのが、実にこの『華嚴經』より始まつて居るのである。

即ち良忍上人が『華嚴經』の事々無碍と、念仏とを一つにして、融通念仏をお始めなされたが実に日本に於ける念仏宗の始まりである。融通念仏宗に於いて「一即一切仏、

一切仏即一仏」と言いて、一南無阿弥陀仏を称うるの中に、一切仏は皆籠つて居ると説くのは、実にこの『華嚴經』の味いから来るのであります。

而して其の良忍上人のたしか孫弟子かと思う——孫弟子の法然聖人に至つて、茲に純粹の念仏になつて來たのである。

故に歴史的に言へば、法然聖人に至つて『華嚴經』より出た念仏が、純粹の念仏になつたという關係に在るのであります。

なおも一つ云へば、支那でも、念仏と『華嚴經』は非常に近しき關係にあるのである。御存じの如く支那の五台山は名高き華嚴の道場で、而して念仏はこの五台山に在つたのである。我が国でも天台の慈覺大師が入唐してこの五台山に登り、念仏の法を日本に伝えて、常行三昧の念仏を修せられたというのである。殊には、第一曇鸞大師がその附近に居られて、毎日五台山に行きて、不思議な出來事に遇われたということが謂われて居るのである。で、斯く日本に於いても念仏は『華嚴經』より起り、支那に於いても密接な關係が存するのである。

なおも一つ言へば『大經』の序文に

「仏の華嚴三昧を得て、一切の經典を宣暢し、演説す」との言葉もあり、なおその辺一体の言葉使いがすべて、『

華嚴經』の味いで、斯く発端より『華嚴經』との連絡が見えるのである。

まだその外、

「みな普賢大士の徳に導うて、諸の菩薩の無量の行願を具す。」

との御文もあり。又廿二の願の中には

「常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん」

との御言葉もあり。第一『大經』の文句からしてが、よく『華嚴經』に似て居るのである。已上は此の他力の法門と『華嚴經』との連絡を申したのであります。

処で、それなら親鸞聖人はこの意味で『華嚴經』をここにお出しなされたかと言うに、然うで無い。親鸞聖人はかゝる細かき關係に頓着なく、頭から『華嚴經』全体を他力と見て御仕舞いなされたのである。それはどう御覽なされたのであるか。これは私共今より考えて私に然う思わせて貰うまでの事であります。聖人は先日來お話するこの『信卷』でも、初に『涅槃經』を引き、次に『華嚴經』を引き、又『行卷』でも、先ず『涅槃經』を引き、次に『華嚴經』を引き、殆んど『涅槃經』を引き、次に『華嚴經』を引か

るるが、聖人の御きまりになつて居ると言つてもよいのである。

何故、聖人が『涅槃經』と『華嚴經』とをお引きなさるかと言ふに『涅槃經』は釈尊八十、御入滅の時に、菩提河畔で阿難を呼びかけ給ひ

「如来の色身は滅すと雖も、法身は滅せず、

如来は常住にして変易あること無し。」

と、如来の法身常住の涅槃の境界をお説き下された経が『涅槃經』である。その釈尊のお説き下された、涅槃の如来の境界は、即ち我々が、此世の因縁尽きて浄土に参らせて貰うと到らせて貰う所の涅槃の極果である。それならば又『華嚴經』の方はどうかと言いますに『華嚴經』に釈尊が、あらゆる世界、あらゆる処に、文殊普賢等の無数の諸仏菩薩が、或は日月星宿の如く、或は百花の爛熳たる如く、重々無尽に現われて下さるとお説き下された、その『華嚴經』の蓮華藏界の有様は、即ち『正信偈』に

蓮華藏世界に至ることを得れば、

即ち真如法性の身を証せしむ。

煩惱の林に遊んで神道を現じ、

生死の園に入つて応化を示すといえり。

無量無数の諸仏が、法性界より姿を現わし、煩惱の林、生

死の園に遊戲して、我々をお導き下さる還相廻向の有様となるのである。

即ち先言う『涅槃經』の方は我々が広大な御恵を頂いて浄土に参らせて貰ひ、得させて頂く処の真如法性の涅槃の味いをお示しなされたとなり、これは往相の廻向となる。

こは『和讃』に

往相の廻向とくことは 弥陀の方便ときいたり

悲願の信行えしむれば、 生死すなわち涅槃なり。

又『華嚴經』の方は、其の広大なる境界より、無量無数の諸仏が現われ、我々をお導き下さる姿となり、還相廻向の有様となるのである。これは『和讃』には

還相の廻向とくことは 利他教化の果をえしめ、
すなわち諸有に廻入して 普賢の徳を修するなり。

斯く親鸞聖人のお示しより頂くと、広大なる『涅槃經』『華嚴經』も、全く、往還二種廻向の味の外無くなつてしまふのである。

否『涅槃經』『華嚴經』ばかりで無く、釈尊一代の教説が、親鸞聖人の思召しよりすると、往還二種廻向の外無くなつて了うのであります。

そこで若し『華嚴經』の当り前の読み方よりすると、茲に一輪の花咲いてあるは、これもピルシヤナ法身が現れて下された姿であるというようになるかも知れぬ。

さりながら、他力より言う時は、他力は往還二種廻向ともに、遣る瀬なき阿彌陀仏の本願なれば、何頂くも、この罪深き私を見捨て給わざる親心を頂かそうとの、大悲の御手廻しと頂く外なしとなるのである。

で、他力は広く言へば、今言う極まりなき釈尊一代の説法が、南無阿彌陀仏の一つで頂けるのである。

広大なる往還二種の廻向の御哀れみが、頂く処は南無阿彌陀仏の一つで与えられるのである。さりながら、その頂く処は南無阿彌陀仏の外無いという処を、余程注意しなければ、ならぬのであります。之はさきいう『華嚴經』善財童子の事につき申しても、如何にも我々も人生種々の出来事に遇い、種々なる方面よりお手引きを蒙るのである。

けれども其御手引きはそれによりて我々罪深き者が、此者をお見捨てなき大慈悲を知らせて頂きたという事にて、若し茲でお手引きが直くお慈悲じやとなつたら大変な間違いに墮するのである。現に昨日も、或方は盗難に遇い何も彼も皆盗られて仕舞つた。……其方は、それまで家庭問題で悩んで居られたのであるが、処がその盗難に遇い、何もかも皆

取られてがらりと無くなり、其の時、如何にも当てにならぬ世の中じやと一念思うたら、同時にに自分如き悪しき者をお見捨て無きお慈悲なることが有難くなり、今までの苦しみも何もなくなつて仕舞うたと話された。これは如何にも遣る瀬なきお心が、人生の事々物々の上に顕われて、我々を広大なるお手引きでお知らせを蒙るなり、頂く処は何を頂くかというに、この罪深き「うそ」「偽り」の私を、能くも／＼それ程までもお見捨てなきお慈悲の有難やと、茲一つを知らせて頂くとなるのである。で、その之を知らせて下さる迄は、これを知らせるためのお手引きとして、人生の色々の出来事がある。去りながら、出来事そのものは、矢張り人生罪惡の出来事で、これを直ぐにお慈悲という時は、罪惡の人生ということと、忽ちハダハダになるのであります。これは聖人の『和讃』にも、

弥陀・釈迦方便して 阿難・目連・富楼那・韋提・
達多・闍王・頻婆娑羅・耆婆・月光・行雨等、
大聖おの／＼もろともに 凡愚底下のつみひとを
逆惡もらさぬ誓願に、 方便引入せしめけり。

方便は、我々凡愚底下の罪ひとを、逆惡もらさぬ誓願に方便引入せしめるための御導きである。

で我々は今日まで、長々この広大なる御導きを蒙りし事

を思えば

いかばかり御手間かゝりし菊の花

実に無量無数の有縁の人達、無量無数の諸仏菩薩は、長々あらゆる出来事の陰につき添うて私をお導き下され、而して其結局の御知らせで頂く処は、法師、法皇なる阿弥陀仏のお慈悲の外に無い。『和讃』には

智度論にのたまわく、如来は無上法皇なり、

菩薩は法皇としたまいて尊重すべきは世尊なり。

その法師、法皇なる阿弥陀仏のお慈悲を一念有難いと頂くなり、何も諸仏菩薩や、外界の出来事に、一々感謝するに及ばぬ。

諸仏の護念証誠は、悲願成就のゆえなれば、

金剛心をえんひとは、弥陀の大報恩すべし。

唯、南無阿弥陀仏々々々と、広大なる大悲の御恩を喜ばせて貰う。すると

心だにまことの道にかないなば

祈らずとも 神や護らん。

其南無阿弥陀仏を喜ぶ者を、一切の諸仏菩薩は言うに及ばず、あらゆる諸天善神も皆、よろこび護り下さるとなる。

この事を他力のお慈悲の上より頂くが、何より肝腎となるのであります。



さて斯くの如く頂けば『華嚴經』に説かれてある一々の事柄は、他力の信仰上より現わるる味いを『華嚴經』に書かれてある事となる。すればこの処に長々しき御文が、みな一々他力の上より味わるる御言葉故、その積りで銘々に御熟読あらん事を希望致します。

この意味で御覧になれば、一々申さずとも、各自の信念の上より充分頂かれる御言葉故、一々の文につきて申すことは、余り煩雑でもあり、略すること致します。

第三回求道会第六日。

おお先生に手をひかれて

——革新運動随行記——

聴聞子

註 〓 われわれは近角常観師を「おお先生」、常音師を「常音先生」とよんでいた。

昭和四年九月二十二日は求道会館の恒例の日曜講話の日でありました。おお先生は岐阜方面の宗門革新諸演説をおえて夜行で帰京なされ——先生の身辺も物騒なので大川周明氏が車中の用心棒を買って出られました——朝食もそこそこにして、いつものとおり会館で講話をなされました。

「信は道元、功德の母なり」(ケゴン・信巻)という題で。「信」はお慈悲、「道」は秩序思想、「母」は功德の実を結ぶことだと申され「お慈悲の上は曲がつたものは正しくならねばならぬ、また正しい所に返えるものである」と、ご自督の一端をお解きかせ下さいました。

翌日は秋季皇靈祭で休日でありましたが、会館には信者の人が集まつて革新運動のお手伝いをしておりました。すると突然おお先生から「今夜一緒に金沢へ行つてくれま

せんか」とのお言葉がありまして、愚か者の私はひどくろたえましたが、過分の恩命に感激しまして、急ぎ家に帰り身仕度をして上野駅から夜行でお伴をさせて戴くことになりました。

寝台のおお先生はすぐに安らかなイビキに入られました。が、私は心配で眠ることができませんでした。翌朝未明に直江津駅に下車したとき先生から「よく眠れましたか」とお尋ねにあずかりました。

つづいて先生は「アレ間違なくやつてくれればいいがなア」と小声でおつしやいました。「何んでしようか」と伺いますと「切手を上手にはつてくれたか」とのご心配でありました——当時会館では革新運動用パンフレットの発送帯封までは全部でき上つていましたが、切手のお金がないので困つておりました処、先生ご出発の朝早く、はからずも会館の郵便受函に誰かの好意でかなりのお札が入つてお

りました。それで早速切手を買つて急いで出することになったのでありますが、その切手のはり方がぞんざいにならぬようにとのお心使いと分つたわけであります。——「うの毛、羊の毛のさきにいるチリばかりも」のおさとしと拝されたことであります。

○
直江津からの列車の中で先生は、座席の上に端座なされ、明けゆく海のかなたを眺めながらしばらく無言の中に過ぎましたが、やがておひさをゆるめて「拝読がすみました」とひとり言のように申されました。なに事かと伺つてみますと、朝のオットメがわりに『歎異抄』を黙誦なされたのであります。それから朝食をとられました。が、ご病氣のためご持参のパンとチーズのみでありました。

○
いよいよ金沢市公会堂で演説という事になりました。私の演題名につき先生からお尋ねがありました。前夜寝ずにもだえた私は夢のような題目を申しあげますと、即座に先生は「それはいけません」とおつしやられ、私の胸はさながら断がいのにぞむ思いでありました。一方会場では弁士の出題を待つておるとの事でありましたから、まよとばかり改めて「思想国難と信仰問題」と申しあげました。先生も

いた事に気づき、先日の「信は道元、功德の母」という折角の講話もウカツに聴聞していた事を暴露してしまいました。

○
余事ではありますが、先生の金沢演説会の模様は地方新聞に大段的に報道されまして、私は勤め先の本社最高幹部から詰問を受けたことがあります。理由は、信仰上の事とはいへ財界に奉任する者が宗教上の争いに加担するのは慎むべきだというのであります。早速先生に申しあげて釈明書を出し幸い大したことはありませんでしたが、その際お示し下さつたお先生の「慈愛と真実」のお姿はいまも変わらず私を見守つていて下さるよう思えてなりません。：「ひとりいて喜こばふたりと思ふべし。：そのひとは……！」

昭和三十八年十二月一日記

ある夜のおお先生

昭和四年二月、宗教団体法案阻止運動のころでした（註同法案は近角常観師の熱烈な反対運動により貴族院においてにぎりつぶしとなる）。求道会館の先生の許へは日夜沢

「それはいい」との事でホッとしたしました。——「悲体のいましめ」に遇つたことであります。

○
革新演説会も無事かつ、盛大裡に終りました。一行は翌夕方金沢駅から帰途につく事になりました。おお先生はご令弟の常音先生と先きに列車に入られて後から来るわれわれを待ちになつておられました。発車時刻にさしかかつてもし一同の顔が見えないので大変な心配でした。処で一方お伴の連中は大量の革新パンフレットを入れた行李をチツキにしようとしたが駅の窓口で承知しません。すつたもんだで元氣な浅井鍵治郎君（故）や温厚な文常さま（おお先生のご長男・ご戦死）までが真赤になつての交渉談判。とうとう駅の助役さんもコナラの熱に動かされて持ち込みを許してくれましたが、汽車はすぐさま走り出しました。そこでおお先生から遅れて来たワケをただされまして一同興奮をおさえて答えました。先生は申されるには「おかしいじやないか。全体正しい事をしなくちやならん、曲つたことは廻心・懺悔すべし、という旗を立てて信仰運動をして歩いてる者が、現に規則の認めないことを強引に押し通そうとするものではないか」というおさとしてありました。一同も、なる程「お慈悲のはきちがい」をして

○
山の信者の方が集まりました。皆さん生業があるので大方は夕方から伺つて先生から明日の運動方針を授かつたのですが、若干の者達は先生と一緒に夕飯を頂き、引続いて夜陰まで討議を重ねました。こんな時こそ先生から生きた信仰問題の八臨床講義に預りたいものと願うものですから論議は至つて活発で、先生ご自身も大重になつて一座と渡りあうという剣幕でした。お疲れになると先生は時々こくりこくりとイスにかけたまま眠られました。が、一、二分して覚められると直ぐまた論議に割り込まれるといった光景でした。そうしたある夜のことでした。論議の途中で先生は手洗いに立たれ、さてお戻りになるや行成り「全体あんな考はいかんじやないか」と烈しい口調でおつしやるので一同あつけにとられました。というのは実はその案こそ先刻先生自身の発案提唱なされたものだったからです。そこで元氣の一人が「でも先生、それは先生のご提案でしたか」と申しあげますと、先生すかさず「ワシが言おうと誰がいおうといかん事はいかんよ」とのおさとしてした——まことに我の根の切れた、いわば天馬空を行くのご容子と拝した事であります。

○

これもある夜のおお先生の一面です。夜十二時を過ぎますと会館からの帰りの電車がなくなりま

した。先生は時間など頓着なく画策論議を進められました。そして最後に解散の段になると、いつもきまつてタモトから財布を取り出され、あのふくよかなお手先で——常観師の掌相は有名で、当時ある手相の本には、家康と並べて師の掌相図が載っていました——つまんで自動車代として過分に下さいました。一刻も早く帰って家人に安心させよとのお心遣いでありました。毎度の事です。遠慮しなすといふある人から下さるもんだから、どうか頂いて下さい。」との事でした。ただ一度だけ、ある時、財布の中に先生ご期待ほどのお鳥目が見えなかつたものか「今夜はこれきりで、すみませんが」と申されて、それでも円タク代には過ぎた額を気の毒そうにして、下さいました。——こうした八先きの先きまで見て下さるV如来の代官ぶりを、かしくも幾度か拝し得てまことに感無量であります。

昭和三十八年十二月四日、記。

雀

ツルゲネフ

獵から帰つて、庭の並木道を歩いていた。犬は前を駆け行く。ふと、犬が歩みをゆるめて、行手に獲物を嗅ぎつけた時のような忍び足になった。

近角先生を憶う

昭和三十一年

今日は十一月二十六日である。午前二時にケネディ前大統領の葬儀がワシントンの国会議事堂で行われ、日本からも池田首相、大平外相が参列した。この模様が宇宙中継によつて伝えられ私も自宅のTVで直接見ることが出来た。通信技術の発展は全く驚くべきことである。世界は狭くなつた感じがする。此度の出来事は思いがけないことで、科学技術の発展と逆に、人間の生命の果なさも思わせられる。つい先達も、博多の近くで列車の二重衝突で、私の教え子で九州工業大学の教授である人が妻君と一緒に八人の死亡者の数に入つて死亡した。これも全く一瞬の出来事であつた。こういうことを見るたびに、後世の一大事を思わせられる。

「八万の法蔵を知ると雖も後世を知らざるものを愚者とす」

と、蓮如上人はお示しになつたが、私は昔、近角先生に後世を知る知恵を頂いたことは何と云うしやわせものである。今日計らずも、花田さんからお葉書頂き、近角先生の

見ると道の前方に、嘴のまわりの黄色い子雀がいた。頭には綿毛が生えている。白樺の並木を風がひどくゆすぶるところを見れば、子雀は巢からふり落されて、生えかけの翼を力なくひろげたまま、じつと動けずにいるのだ。犬は静かに歩み寄つた。すると不意に近くの樹から、胸毛の黒い親雀が、犬の鼻先へ石のように飛び下りて来た。総身の羽をふり乱し、懸命の哀れな声を絞つて、二度ばかり、白い歯をむく犬の口めがけて襲いかかつた。親は子雀の生命を、身をもつて庇おうとしたのだ。けれど、その小さな身は激しい恐怖におののき、啼く声は狂おしくかれていつて、終に氣を失つて倒れた。その身を犠牲にした。

雀にとつて、犬はどんな巨大な怪物と見たたろう。にもかかわらず、彼は高い梢に安住しては居られなかつた。意志よりも強い何ものかの力が、彼に身を投ぜしめたのだ。トレゾールは立ちとまり、ジリジリと身を退つた。彼もこの力に撃たれたと見える。

私は、当惑している。ふと、胸に心いれでそこを立ち去つた。そう、けれど笑つてはいけない。私はこの勇ましい小鳥の前に、その愛の激発の前に、肅然と襟を正したのだ。帰りがら思つた——愛は死よりも、死の恐怖よりも強い。これによつてのみ生活は支えられ、また推し進められる。

一八八七年、四月。

室 住 熊 三

二十三回のお命日の近いことを、先生に有縁の人の事ども知らせて頂き、先生の亡くなられた当日のこととも思い出し、私が一高の徳風会で、先生を中心に撰つた写真と、昭和十七年十一月三日に博多で、先生の奥様、常音先生御夫妻をお招きして、先生の一週忌をいとなんだ時の記念写真を眺めながらなつかしい追憶にふけつた。

昭和十六年十二月三日。私は明治専門学校の教官であつたが、校長の依頼で学校のPRに出かけた。第一日が大部分で、三日に大分中学で講演して、浅尾新十郎さんの御宅にとまつた。浅尾さんは、京大の電気工学科の卒業で私の先輩である。私は電気関係で、同氏と知り合つたのでなく、近角先生の御縁で知り合つた同信の法友である。その夜は近角先生の御教化をうけた人々が集まり、先生のお噂をして夜の更けるのも知らなかつた。とくに、麻生さんが最近上京して先生にお目にかかつたと云うので、先生の近況を語られ、皆もなつかしい思いにしたつた。翌日は延岡に行き、その翌日五日に高鍋中学で明専の特異性の「技術に堪

能なる士君子を作る」山川先生の理念と、私の信念の、科学と宗教との深い味を語り、校長に近角先生との御縁を話したところが、初めて先生が三日に御逝去なされた事を聞かされ、全く寝耳に水の驚きであつた。何も知らずに、同信の人々が大部分の浅尾さんのお宅で先生のことをお噂申上げて居たその日に先生は永き眠りにつかれたのであつた。全く凡愚のはかなさに、全然それを知らずに居たのである。

心霊学と云つて、人の霊が互に通じ合う、という説をなす人がある。私が自分の専門の電波の話をして、此処に電波が来て居るが、この目には見えず、この耳には聞えない。しかし、受信機を持つて来ると聞える。

故に、この目に見えぬ、この耳に聞えぬからと云つて、ないのではない。電波は実在することが、受信機を持つてわかる。仏の御呼び声もその通りで、信心の智慧がひらけると、心の耳に聞くことが出来るというようなことを云うと、心霊学の信者はその通りだ、吾等は靈感を感じる、丁度電波の通りであると云う。私はそう云うことを聞くと、それは大きな間違いだと云い度くなる。昭和十九年六月十六日に私の可愛い娘は二人の孫と共に、五・六丁しか離れていない杜宅で、B二十九の爆弾に一夜の中に泥まみれになつて死んでしまつた。私は明専官舎の待避壕の中に居て、夜明けまで何も知らずに居たような無能力者である。とて

虚 仮 と 真 実

単独のとき、はたして自己の正視が出来るであらうか。

単独であると、やゝもすれば、汚れたさもない自己が、姿を見せる、然し、その場合、多くはあわてて衣の前をかいつくろい、もつぱらこれをおゝい隠そうとつとめる。それまででなくても、必ず弁明をくりかえす、笑うべきである。二人のとき如何。

友情にてとけあうというが、全然とけあうことが出来るものであらうか。これを見るには恋の場合が一番いい。恋は魂のとけ合ひであると人は見るが、果してそうか。むしろ恋はおのれの胸におのれがあこがれるのをいうのでなからうか。自己の投影を恋人に見るのではなからうか。これ恋に理智が芽をふくと、即ち他の個我を静かに観察し得るの心境となれば、直ちにここに破綻を見、夫婦は恋の墓場とさへなる。とけ合うことの出来ぬ二つの魂が、肉の石塔を淋しい家庭に建立することとなる。これをもつて見るのに、各自は結局利己である。利己心に厚いので、常に没落の悲哀を味う。

も電波などは出て来ない。あれだけ愛した子供との靈感は何にも無い。昭和十六年十二月三日、先生の御無事を念じつつ、共に語り、寝についたのに、先生はその日東京で御他界なされたのである。かくの如き靈感もないで見ようのなき者を、どこまでもお見捨てなく、これを不憚に思い、援けねばおかぬのが阿弥陀さまであるぞよと仰言るのが、近角先生のお教であつた。

私はこれを、そういうものかなと、ただお話として聞いて来た。ところがある時、そう近角先生が仏様のことをお話して居られるのでなく、これは仏さま、じきじきのお声だと感じた。

大無量寿經を説かれるときのお釈迦さまは、光顔巍巍として居られた。お釈迦さまであつてお釈迦さまでない。阿弥陀仏のお顔である。お釈迦さまのお話でなく、阿弥陀さま直々のお説法であるということが尊い。

近角先生が「仏さまは、どんな悪いものもへだてなくお助けなさる方だ」と、仏さまの御紹介をなさるのだと聞いて居たのでは夜は明けない。近角先生のそう云われる事、それが仏さまの直き直きのお言葉と拝承するとき、あゝ有難やと信心が頂けるのである。何という廣大無辺のお慈悲でしょう。

今日は思いがけもなく、花田さんのお便りについて先生をしのび走り書きにこの一文を書くことになつた。南無阿弥陀仏。

阿 刀 田 令 造

多数のときを想う。

結果をあせり出すや否や、大向うに全く引きずられることとなる。知らず識らず自分から自分が離れる、偽善もやる、瞞欺もやる、実に宿業ほど恐ろしいものはない。

名聞、利養、勝他のおもい、徒にさかんであつて、到底真を語る境地などがここに展開してくるものではない。

すでにかくの如し、真を語るに口舌を罪すべきでないことがよくわかる。否、この二者は仕える主人に対して案外に忠実である、すくなくも主人を裏切ることなどはあるべきはずがない。

また真は蠟に似ている。外氣に一触すると、忽ちに失てその生命を失う。わたしから見るとこれも違う。真を現わそうとする刹那にも魔の手が必ず加わる。利己が同時にとび出して、その真を混濁する。即ち、この状態を指して生命を失うというのならそれでよろしい。

利己を主張するのは極めて無難作である。然し、自己の正体を抽出さんとするは決して容易ではない。真を語るは難

中の難である。ころみにこの問題について真摯の態度を取つて見よ、必ず思いあたりに相違ない。真を語るべくあまりに己の不純で、その有様は丁度ラッキョウの皮をむくにも類似している、際限がない。どこまでむけばよいのかとの疑惑が追かけてくる。この疑惑は誤魔化し得る質のものではない。

こう考えてくると「何の取柄もないが嘘、偽は申さぬ」などと、朝夕の言語も空おそろしく口に出せなくなる。また「罪を犯したおぼえがない、素純、純白である」などは、いかに虚勢を張つて見ても発表し得なくなる。唯ひとえに自己の不純に手も足も出ぬことをのみ実感する。然るに、世には罪惡が獲信の正因であるとの考えをはきちがえ、むしろ罪惡にしたしまんと企てているものがある。実にこのことは聖典に「藥ありとて毒を好むべからず」とあるのは、この邪念を真向から粉碎せんとする鉄鎚、もはやここに一言を加える余地がない。

ここでわたしは、ある一部の人が、親鸞聖人の煩悶を味うにあたり、婦人問題などに運んで行こうとする態度にすくなからず不満をもつ一人である。わたしは自己の内面生活を真剣に考える人であれば、實際上の罪科はなく、世間的の悪行はなくても、おさえ難い苦悩にとらえられるにきまつていいると思つてゐる。それは素直に自己をみつめる

ては、いたずらに聴衆におもねつたものである、また誘惑である。わたしとしては、斯う論理が進むにつれ、わが内兜にもこの筋がとどまり、ここに新しい手傷を感じざるを得なかつた。これはつらい体験であつた。

要するに、虚仮不実、露ほどもまことあることなき身である。これがわたしとして判らして貰つた全体である。しかし御仏は愛憐のまなこをむけて、五劫の昔かこちらを見て下さる。そこをわが親鸞聖人は善知識となつて広大な慈悲をとどけて下されている。わが近角常観師は更にねんごろにこの思召を裏書きして下さつてゐる。わたしはこの間の善巧方便を想い起すとき、御仏に対し身を投げて感泣せざるを得ぬのである。

往年いという子を亡くした。愛着の涙のはふり落つる間にも、大慈悲を慶喜する心がおいかけて、心の全面にひろまつた。思うに、大慈悲は炭を灼熱の状態とするに足るものである。もとより炭自体にはその作用は尋常事でない、自己も語れる、真も述べられる、口舌共に自由にして何等渋滞する所がない。

然し人は右の道を迂遠という。「この地下泉を掘り下げないうちは、ふところ手をして待つてゐるのか」と皮肉をいう。こんな皮肉に答えるのは無用であるが、なじる者を憐れむ態度をもつて一言する。先ずここに時間を見るのがお

とき、当然いたるべき結論であるからである。浅薄に考えると、実際問題は仏縁を熟さすのに益だつのであるから、いやしくもそれに頭をうちつけた人物なら、難なく入信が出来ると思えるが、この問題も実はまちまちで、必ずしもそうばかりとは限らない。多くは実際問題となると、当面の解決のことばかりに心が傾いて、遂に根本的解決に眼をつけにくい。精しく云えば、当面の解決ばかりに屈托し、こうした姿に対する無限の同情にひれ伏し得ないのが、我等のあさましい正体であると折れ得ない。即ち、実際問題がむしろさまたげをすることもあるので、このいきさつを思うにつけて、私は聖人の苦悶のうちに実際問題を取りあけるのは無用であると知らされる。またひるがえつて実際問題をひきおこすでなければ、大慈悲に浴することは出来ないという不信をいましめねばならぬと思う。

不純である、不実であると蹴おとさることはまことに悲しい。されば、自己を高きに置き得る人に対しては常に羨みもおこつてくる。嘗て尾崎學堂氏の演説をきいたことがある。氏は現代をもつて「千疊敷のうち二三枚を叩いて塵のたつのに驚いている愚に等しい」と痛罵せられた。成程そうかも知れぬ。然しもしそうならば、更に氏自身も同じ反省に帰し、自己の懺悔となるべきである。然るに聴衆と堅く手を握つて「ここだけは清浄の天地である」とあつ

かしい。御仏は衆生に対して救済の約束をたてて居られる。つまりここを自覚するだけのこと、よつて言下に飛躍が来るべき筈である、光明にそのまま摂取せらるべきである。また凡夫も直入すべきである。精しく言えば、自力作善の道によつたなら、そこに徹底的に自己を発見すべく長年月を要するにきまつてゐる。よつて先きの問者の説を可とすべきであるが、わたしは初めからそこに屈托したつもりはない。小さな自己のはからいに停滞せんとしたのではない、御仏の絶対無限の存在に全くうちまかせ、所謂、絶対信任を表明せるものであるから、ここに時間を見るはあたらないのである。然るに、また気の短い者は、地下泉に達せず、達した場合の状態を予測し、ここに律法を編み、それを以て人に強いる者もある。或はこれを以て目前の社会面をたくみに整理し得るかも知れないが、これがはたして人生に真の幸福を招来するの道であらうか。

わたし達は人情に傷われ、学問に痛められ、まことにひねくれているがため、信仰にへだたりがある。わたしは一文不知のわが慶念坊(宮城県遠田郡湧谷小塚に墓碑がある)が忽ちにして妙好人となり、法悦にひたりつつ、真の社会奉仕を行つた消息を聞いて、ことにこの感を深うする。或仏教雑誌に「慈悲をいたたくにしても、やはり学問が必要である」とあつたかの如く思うが、これは違う。もつ

ともわたしはいたずらに學問を否定するのではない、信仰をいたたく上から見れば、何もこざかしい學問などが条件でないというまでのことである。然し、信後に於いて學問は決して邪魔になるものでなく、悲願の広大な旨を知るには欠くべからざる準備であることは、歎異鈔にもよく見えている、わたしはこの肯定を極めて有難く味読している。

わたしは差別の世界にあらわれる場合、この無量光に恵まれるのでなければ、到底力強い歩みを踏み難いと言いたいのである。即ち、ひとたびこの光照をこうむれば、事が志と違つたにしても、又は人が我をよく容れないにしても、独り書齋裡に入つた時、到底とめ得ない大慶喜を味うべきである。然るにこの場合、無限の寂寞より外に感じ得られなかつたならば、その人は矢張り敗者である。

然し、結果を想念することは、信仰を徹到する点において一種の障礙となる。力強い歩みにのみ一念が傾くとき、御仏はわれらに顔をそむける。もつとも、そうわかつて結果を夢想せぬわけにはいかぬ。理想を樹立して、それに向つて突進することを廢めるわけにはいかぬ。然し、凡愚底下のこの身では、到底想う通りな結果も、理想の実現も共に期し得らるるものではない、従つてわたし達の分際としては、全く御仏の善巧方便に乗托して、つつましげに生活を営むだけのことである。

結果に重きを払うとき、これに添うた効果が見えるのが

一般である。孔子教は現実社会の整理に没頭した唯一なものであり。そしてその効果は本国において、またわが国においてすこぶる顕著なものがある。カルビンもここに着眼し、社会訓練をきびしくした積極的戰闘的態度を示した。世間にかかる場合、教の範圍と人数とを見て、その成功を讃美してやまない。且つ、ここに価値をみとめてその教を尊しとする。これはよろしい。然し、これをもつてルーテルを難するはあたらない。彼は結果を思わない、故に、彼には政策も、妥協も、譲歩もない。否、宗教の眞価を判断するのに、結果から来る外的事情をもつてするは浅慮である。それと同様に年数を以て計るは輕率である。わたしは安心状態からこの問題を眺めたい。くわしく云えば、嚴肅なる信条に支配せられて実現せられた社会面は、宗教生活よりも道德生活に近い。そして私の欲するのは前者であつて後者でない。故に私は道德生活をもつて自ら行い得る何物かを私達に供したとき、それに宗教の値をつけたい。またジュネーブの住民がすべてよろこんでかの実生活はげみ、教会国家をはからいなくして造り得たならば、彼の教に価値をつけたい。私は道德との交渉をこう見たいのである。宗教をもつて道德生活の基礎と考えたいのである。私は西田天香氏の一灯園の生活を見るにしても、同じ尺度

美

高村 光太郎

を以て測りたい。西田氏ははたして数多くの信徒に信仰の醍醐味をあじわらせたであろうか。かれらの社会奉仕は、おさえ難い法悦のあふれからであろうか。これも各自信仰を味う上において、めざましい結果にあざむかるべきでないと思う。私たち全幅の熱望は、信仰の獲得にある。そして社会奉仕の心的準備としてここに着目するのでないことはあえて申すまでもない。

宗教のほこりは、決して数ではない。信仰の徹底にある。法然上人が、わが親鸞一人を發見したことが、どれぐらい意味があるかわからぬ。そしてその収獲がまだ十分に刈り取り得るようになっていない。精神的種子は容易に莖をなさない。

この間に立つて決して輕率な判断を下すべきでない。要するに一切の問題は、御仏の本願力を信することに於いてのみ解決が出来る。自己を語るも、眞実を伝うるも、すべてここからのみ発掘する。

大正十五年九月發行、慈光叢書。

私は美術のことに従つてゐる者なので、この世の美について常に心を用いざるを得ない。そして世人の普通考えてゐるような、眼や感情にただ奇麗に見える事物をただちに美なりとする考え方を、もう一步深めてもらいたいと熱望している。

美とは決してただ奇麗な、飾られたものに在るのではない。事物のありのままの中に美は存するのである。美は向うにあるのではなく、こちらにあるのである。

芋虫は身ぶるいの出る程いやだという人達が、蚕はおこさまと云つてわが子のようにいつくしむ。それは莊子のやうに「利のあるところに愛あり」と解するのはあやまりであつて、事物に深く親しみ、事物を深く觀察するところから自然とその美を感じるにいたる好い例なのである。

戦場にある軍人が多く歌俳句を好むようになるのは一切を洗い流した魂がおのずから深い美を万物に求めるからである。

美を浅い、うわべなるものと思わないようにしたい。

昭和十四年十月。「美について」より

酒見忠勢先生 信仰講話 (三)

西 村 正 安

私はかようにして近角先生の講演を聞くことになりました。当時の私は実に不遜なものでありました、講話の聞き方でも、正面に座らないで、横向きに座り、高慢な態度を失わないように備えて居つたのです。三日目になつて、先生に質問をしましたら、先生からお話があつて、本を下さしました。その次の日の講話の時、チットモ耳に入りません。私の頭の中に八天命これ畏るゝという声がひびきわたりました。先生のお話には一度も云われなかつたものす。不思議にこの声がかきこえると、私の今迄の悪い罪という罪がごとごとく現われて参りました。それは実に恐ろしいことばかりであります。その折に、私は初めて神を感じました。

私は元来四寸の学問ということ嫌つて居つたのです。四寸の学問とは荀子の言つたことで、耳から聞いて直ぐ口に出すということ、つまり受け売りをすることです。あります。これではならぬ、よく頭で消化して、知行一致でなければならぬ、行えないものは言わないというような

考えを持つて居ります。私は神道の家に生れ、子供の時から神を信じて居りました。ところがその当時私が見た神は、それは天命の神様でありました。私はその神の前に出る資格が一つもないということを思い出しました、何処か穴にでも入りたい、遁れられるものなら逃げたいという一杯でありました。しかし神様が見えないところへは逃れることは出来ないのです。私は神の前に居ることも耐えられませんが、また遁れる所は更にありません。進退全く究まつたというのはその時のことです、私はとても生きて居られないと思ひましたが、死んでも神からは遁れられぬと思ひました。キリスト教では、神様は、ノアの洪水を出して悪い者を殺されたと思いますが、その殺された人はその先きは一体どうなるのかと思つて見ると、人は死んでも罪からは遁げられない、神の眼からはどうしても離れられないと思うのであります。私はかくの如く、天命の神を恐れました。遁れる所がなく困りぬきました。その折には私は頭の先きから足の先きまで油汗が絞り出されて居りました。その

時です、その折です、それまで三日間も聞いていた仏様のお慈悲のやるせなさ、あたたかさが私の頭にひびきわたつたのであります。私はその時に仏様のお心を私の心に聞いたのであります。すると私は何ともいいようのない心持になつて、只南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とお念仏が出るのであります。同時に眼から涙がでる、身体からは汗が流れ出しました。

その時の気持は、とても言うことは出来ません、強いて言つて見ようなら、

「神様は実に恐ろしいお方である。阿弥陀仏は実に実におやさしい仏様であらせられる。仏様のお慈悲にあつて見ると丁度赤ん坊が母親に抱かれて乳房を口附けられた時の気持である」とでも言いましょうか。私は仏様の心にふれて、なつかしさと恥かしさで胸が一杯でした。なつかしいからといつても決して横着にはなれない、それは実にお恥かしいのである、如来の徹鑒力は私の心の奥底までも見通していられるから、私は只お恥かしいのである。

その時の私は、丁度底なし井戸の中に居て、横の石垣にしがみついて自分の力で上に昇ろう／＼としていたようなものであつたのです。私はそこで上つてはすべり落ち、上つては落ちして居たものです。取りつく指は血だらけになつて居ます。そしてがけがはがく程下に落ちるのです。

それはやがて底なし井戸のどん底に落ちこむのです。地獄必定というのはこの有様をいうのだと思ひました。私には道德というものは一つも出来てやしない、不道德の限りである。私は刻々に落ちているのである、地獄は一定すみかと思つてゐるのに、そのものが可愛想だと、うしろから抱きしめて下さつたお方がある、それが仏様であつたのです、阿弥陀仏は、私のこの有様をご覧になつて、可愛想だと抱きとつて下さつたのであります。かように仏様に抱かれてみると、私はもう落ちる心配がなくなつて、それと共に自ら上ろうとする一切の努力をふり捨てて、すべてを如来にまかせきつたのであります。そうなると初めて上の方を見られるようになり、上を仰いだのです。すると井戸の上には光明がさしている、ひかり輝いている、私は初めてその光明を仰ぐことの出来る身となつたのであります。如来のお力によつて、ひかりの世界に引きあげられているのであると知れて来ました。この光明の世界こそ彼岸の世界であります。實際人生の前途には、それは／＼ひかり輝いたものがあるものです。

空論的に考えた極楽は眞実ではないのですが、私共が実験すると私共の前途には光明の世界があるのです極楽があるのです。このように私は僅かの実験をしてからは、私はもう思い悩むことがなくなりました。南無阿弥陀仏を称え得

る身になつてからは、私はよく眠れるようになり、また近角先生の講話の味がまた格別に味えるようになったのです。それからの私はこんな思いで居ります。……實際私というものは実に不徳な人間である。仏様から照されれば照されるほど私の不徳の程が見え増すのです。しかし私が如何に不徳であつて、何一つ出来ないものでも、如来の願力が無窮にまします故に、チットモ心配はいりません。如来は私をよいように計らつて下さるのであると思うと、それから私は人様の前に出ても、もう心配なしに心に浮んだそのままをお話することが出来るようになったのであります。それは理屈も何もない、ただそうなつたのであります。現在私は仏様に抱かれて居ります、それは未来までも抱かれるのです。私は何時死ぬかも知れませんが、そうするとその行く先きについてびく／＼することもいらず、仏様に抱かれて、その行く先が如何ようになろうともちつとも差支ないと安心出来てゐるのであります。「私はこんな話を香川県の教育家諸君にもいたしました。」と西原君に語りました。「どうです西原さん、貴方は仏様はどんなものかと研究するよりも、貴方の持つてゐる煩悶を取つてもらつたらよいではありませんか、貴方は仏様のお慈悲をいただければよいではありませんか。近角先生は、仏様はどうだとか、こうだとかは決して仰せられないで、先ず自分の心の

方から先きに言われて、その疲れた心を仏様は御覧になつて、やるせなく思召し、それが可愛想だと同情して下さるのである、私共は只そのお慈悲をいただければよいのであると申されます。仏様をとにかく説明するのは仮定の説である、私共が淋しくてならぬ時には、仏様はこの私を慰めて下さるのである、お前一人居るのでない、われはお前について離れぬぞと仰せられる。近角先生が煩悶の時にも、親切な友人が一人欲しい／＼と悩まれたのであつた。友達から君は正直だから心配するのだといわれると益々苦しめられてしまふことだらう／＼と苦しめられた。この自分の心の奥底までも見通して、それを知りながら親切にしてくれる、友人が一人あつたらと苦しめられたのである。最後にその友人がありながらそれを知らなかつた、仏様とはその友人であるが気付かれたのである、人が淋しい時にはその淋しさにご同情下さつて、さぞ淋しいことであらうと言つてござる方が仏様である、それは体験され得るものであります。近角先生は常々このように仰せになります。私はほんとに近角先生を観世音菩薩であると思つて居ります」「私は或時夢を見たのです」と私が話を続けると、西原君は私をひどく見つめます。「私は夢を見ました。それはある大きな建物の中にはいました。それは非常に高い建物で下から

は幾階建だか見究めがつきません。私はその建物の中に入りエレベーターの所へ行きました。しかしその中は真暗で私は乗るのをためらつて居りました。すると近角先生が後から私をボンと押したんです、そのはずみに私はヒヨロ／＼となつて、その拍子にエレベーターに乗つたんです。すると直ぐ上り始めました。それが七階八階と段々と上つて行きますが、周囲は真暗で何一つ見えません、そして段々と上つて行きます。二三十階もすぎたと思う頃から少しあたりが明るくなつて来ました、そしてそれから上に昇ればのぼるほど、次第々と明るさが増して行きます、遂に階上にあがつて外に出て見ると、それは／＼何とも言いようのない景色でありました。

それで私の夢がさめました、然し夢がさめたと思つたのも夢でした。今のは夢であつたのか、まあ有難い夢を見たものだ、さき程夢で近角先生が私を押しだと思つていたがあれは親鸞聖人であつたように思われてならぬ、先刻のは近角先生でなくして親鸞聖人であつたのだなあ、と思うとそれがまた積尊であつたように思ひ出して来た。私を押ししたのは親鸞聖人であつたと思つていたが、あれは積尊であつたのだなあ、と思うと、いやそうではない親鸞聖人であつた、いややはり常観先生であつたのだ、と色色その思いが変り廻るのである。そこで私は、「お釈迦様であらう

が親鸞聖人であらうが近角先生であらうが、誰であつてもよろしい、私をエレベーターに乗せてくれたお慈悲がありがたい」とと独り言をいつたら、こんどは本当に夢が覚めてしまいました。

私は続けて西原君に申しました。

「西原さんどうです。貴方には今毒矢があたつてゐるのです。それで苦しめられてゐる。今の場合医者の方の詮議立をするのをやめたらどうです。貴方が近角先生に近接されたということは、仏様のお慈悲であります、いすれ煩悶の解決も出来ることがありましよう」その日はそれで別れ、二人で夜の先生の講話を聞きました。次の朝であります。講話が終るなり飛んで来て、「昨夜の講話も、今朝も今迄とまるきり違つて居りました。私は何かしら頭にこたえるものがあるように思ひました。それから昨日貴方とお別れしてこんなことがありました」と大要次の話をしました。昨夜家に帰る電車の中で歎異鈔を開いて第二章を繰り返して読んでおりました。すると隣席の女学生が突然私に「貴方は求道会館にいらつしやつたのですか。御講話はありがたかつたですね……」と話しかけました。それは私が余りに嬉しそうな顔付きをして本を読んでいたのてつい話しかけたというのです。

私は何となくありがたい気持ちになつて家に帰りました。家

に帰ると妻は驚いて私を見つめ、「貴方の顔付がまるきり変つていらつしやる」と非常に喜ぶのです。母親も飛んできて、非常に喜ぶのです。私は不思議に思いました。

翌朝になつて眼をさますと、妻の「お早うございます」と言うのが今までのとは違つて親切にひびきます。そこへ又母が来て「早起きたのか、よかつた」というのです。昨日まで鬼の顔に見えていたのが、今朝は如何にも親切に見えます。……

それから今朝のご講話が格別にあつた、とこんな風に語りました。

一週間の講話が終つて、八日目に浅草別院で、ご真筆の御本典の拝観が許される日で、西原君は奥様と同伴して拝観をすませて帰ろうとしますと、多度津出身で東洋大学の

先生の小野正康君に、案内せられて報恩寺にも参詣。その途々報恩寺の由来や、別院で拝観した御本典は、聖人御帰洛の時、箱根までお供した関東の御弟子達へ「我と思え」とお渡しになつたものであるということなどを聞いたのであつた。報恩寺に参詣する人々は本堂に入ると先ず御本尊を礼拝し、次に親鸞聖人のご木像の前に参拝する。それは一人一人順々にするので、西原君もかようにして聖人のお像の前に礼拝してフト見上げた時に、「この西原がかくの如き煩悶のことを七百年も前からお待ちかねのお姿で

池山先生建立記念碑趣意書

今秋は池山先生の二十七回忌に当ります。先生のお導きを蒙り、お慕い申しております私共といたしまして、この際に何か先生のお心にかなう記念のものを造りたいと願ひより、より談合しております。

結局、先生のご命終の数日前に、お顔をほころばせながら、この世の最後のお言葉、

「何も残るものはない、何も残るものはない。ただお念仏だけが残つてゐる、ただ念仏だけが残つてゐる。えらいこつたよ、有難いこつたよ」

を思い浮べ、先生筆のお名号の石碑を建立することにしたました。場所は、先生のご遺骨がずつと安置せられ、また期せずして自然に有縁の人々が相集りまして、毎春秋は一道会が催されます浄住寺境内に定めました。

おもうに先生の御生涯は、四十二歳の御時の大煩悶の末に「親鸞におきてはただ念仏して」にひらけ、六十有七の念仏の息絶え終られた日まで「ただ念仏のみぞまことにおわします」と、わが御身にひきかへて、縦横無尽に信譽して下さつて、私共を無限に引接して下さいました。「池山先生」と聞けば「ただ念仏」とひびき、南無阿弥陀仏が先生か、先生が南無阿弥陀仏か、渾然として一味にとろけていられたことは、先生に接するほどの人々の誰

あるか」という思いがおこると、涙が出て仕様がな、
恰も電氣に打たれたように「ああこの西原をお待ちかゝの御姿であるか」と、なつかしく、尊前からなか／＼離れられない。あとから来る人々にせきたてられて名残惜しいまに立ち去らねばならなかつた。そうしたことがあつて以来、西原君の態度が一変したので、
「大悲の願船に乘じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず」ということの味があらわれたのであります。

西原君の心に転廻を見たのです。周囲はちつとも変つたのではありませんが、君の心に変りが出来てこの様になつたのです。西原君はその後一ヶ月程して、福岡の高等女学校の先生になり、現在では工業学校の先生となり、専門の化学の研究を続けて居るのであります。

さて入信は一人一人によつて皆異なるので西原君のようになければいかぬと考えてはなりません。或は円満な家庭に生れた人が、家庭円満ということが御縁になつて信仰に入られる人もあり、又知らぬ間に信仰の人となつてゐることもあり。兵庫の伊藤氏という長者は、意外の金を得た時に八転倒の善果梵行（清浄な行）を壊すという経文に驚いて篤信の人となつたものであります。斯様に、信仰は一人々々のことであるから、或人の入信の型にとらわれてはなりません。昭和八年三月十六日。第一講終り。

しもよく知るところであります。

今や先生は池上一切の虚飾を自然に払われて、尽十方無碍の光明と一味にとけて、南無阿弥陀仏ひとつに還帰せられては、更に私共の内心から念仏となつて建現して下さるのであります。その尊容をそのままに、先生の御筆の名号の記念碑を建立させて頂きたいと存じます。

つきましては、大方の皆様方の御賛同を得まして今秋のご忌日まで完成したいと願つて居ります。

昭和三十九年一月中旬。

発起人

松	本	解	雄
楠	原	徳	草
花	田	正	夫

建立計画と募金要項

- 一、記念碑 自然石に先生筆の名号を刻む
- 二、予算額 拾五万円
- 三、送金期日 二月末日まで。
- 四、送金先 京都市右京区山田開町 楠原徳草



あとがき

交際という仏教精神を中心にした寮をお世話下さった方であります。先生はすでに亡くなられたこの原稿は奥様から頂きました小冊子に届けられたものであります。

室住先生は、原稿にありますように、九州工業大学の前身、明治専門学校の教授を続けられ、最近まで鹿児島大学長をしていられました。

聴聞子は、住友銀行に永年勤務せられ、只今は京王帝都の重役。実業界に居られて大切に聞法を続けていられる方であります。特に名を秘して居られます。

西村様は高松市で、酒見先生に導かれた方であります。宿痾をもつていられますが、いよいよ信香をはなつていられ、長岡鶴吉様などとご一緒に法縁を続けていられます。今回は長い間御秘藏下さった筆写原稿を頂けたわけであります。

十二月二日には近角真鶴様御夫妻を中心に江州の西源寺様で先生の御法要がいとなまれました。

☆☆

御案内

毎月第一、二、三日曜、午後一時半。真宗講座と座談会一道会館。市電新郊通り一丁目下車、東へ一丁半入る。国鉄は笠寺駅下車、市電乗りかえ。名鉄電車は呼続下車徒歩二十分。

毎月二十四日、午前午後、昭和区小松町教西寺。法話会。市電御器所通り下車。桜花学園の東。

明けましてお芽出度うございます。例年のことながら、ことあたらしく、蓮如上人の御一代聞書の初題の「道德はいくつになるぞ。道德念仏申さるべし」の一句を思い、四百五十年前の山科御堂における正月元旦の有様をしのばせていただきお念仏の御催促をこうむることであります。

○

昨年十二月は近角先生の二十三回忌の年でもありまして、先生と御縁の深い方々のお原稿を頂き、思いもかけませぬ御廻向をこうむりました。十二月号にも頂きましたが、正月号にも頂き得ました。

阿刀田令造先生は、仙台の第二高等学校長として、仙台求道会をお世話下さり、道

慈光 第十六卷 第一号 昭和三十九年 一月十五日 発行 (毎月一回十五日発行)
昭和 三十四年 七月 二日 第三種郵便物認可

定価 一部 二十五円 (送共)

半年 百五十円 (送共)

一年 三百円 (送共)

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市南区駄上町二ノ八八

印刷人 本田 政雄

名古屋市南区駄上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋二〇四七〇番